こぶし通信

Vol.50
2020.3

■理事長コラム
今こそ、支えあうことを大切に

■新規事業報告
いよいよグループホームの建設が始まりました!

■居宅支援 NEWS
余暇活動について思うこと

■就労継続B型　ここに・すたぁと NEWS
すたぁと10周年を迎えました

■相談支援事業
「親亡き後」の財産分与、財産贈与問題からみえてくるもの

■生活介護　こっから NEWS
パン工房、パンの部屋活動報告

▌奈良新聞の掲載記事

■仲間自治会 NEWS
プレゼントえらびのはなし

▌こっから日帰り旅行を催行しました

▌みんなの期待を背負って大人の世界へ～成人式～

▌第18回こっから祭報告

▌雑誌「さとびごころ」の掲載記事

▌平山郁夫版画展の報告

▌発刊50周年記念プレゼント企画

■編集後記

社会福祉法人こぶしの会
〒630-8424　奈良市古市町529-4
電話 0742-63-6765　FAX 0742-63-6766　発行責任者/ 坂下 伸一
e-mail/kokkara@kokkara.jp　http://kokkara.jp/

Column

こッから成人式に参加して思ったこと

今こそ、支えあうことを大切に

社会福祉法人こぶしの会　理事長　　坂 下 伸 一

「今日は成人式をしてくださってありがとうございます。僕は東市小学校を卒業して都南中を卒業し奈良東養護学校を卒業して、こッからでお仕事をしています。はじめはちょっと緊張してわからない事や、難しい事がありましたが、今はちょっとずつ覚えることができました。とうふの販売にもなれてくる事ができました。最初の販売に行った時は計算が難しかったり、わからないことがあったけど、今は楽勝です。

僕の誕生日は１月16日です。20才になったら休まない、あわてない、声を４にする、疲れずボチボチといろいろ覚えていくことを頑張ります。僕はたまにしんどい事があるけど、みんなに支えてもらってうれしく思います。これからもよろしくお願いします。」

この文は、１月14日に行われたこッから成人式で、Nさんが、参加しているみんなの前で話した言葉です。

成人式は、仲間自治会が中心になりプログラムを考えてくれました。Nさんが生まれてから今日までの写真がスライドで映し出されたり、仲間・家族会の高橋会長・母校の先生などからのことば等があり、手づくりのとても心が温まる会になりました。（成人式の報告は８ページにあります）

さて、この成人式に参加して、私の印象に残ったことは、Nさんのことば、仲間、来賓のことば、どれもが「多くの人に支えられて成長したこと」「これからもまわりに支えてくれる仲間がいることを忘れないで」等、まわりの仲間・人と一緒に成長し、歩んでいくことを大切にして欲しいということを語っていたということです。

人間と他の動物との違いは、周りの人とコミュニケーションをとり、支えあいながら社会を形成していくことにあるといわれています。他の動物でも助け合う場合があるといわれていますが、本能的なもの、命を守るということに限定されています。人間のようにお互いの成長を支えあい、社会を形成していくような関係はありません。

しかし、現在の日本の社会では、そうした支えあうという関係が弱まり、何でもが個人の責任という考え方が強くなり、「今だけ、カネだけ、自分だけ」という風潮が幅を利かせているように思えてなりません。障害のある人をはじめ、弱い立場にある人にとっては、本当に生きづらい社会だと言えます。ですから、こッからの成人式で西野さんを含め、みんなが語ったことは、人間として当たり前のことなのですが、今こそ大切にされなければならないのだと、強く思いました。

新規事業のグループホーム建築工事が１月中旬から始まりました。８月には完成し、９月から入居できる予定です。この新規事業も後援会のみなさんをはじめこぶしの会を取巻く多くの人たちの支えがあったからこそ実現にこぎ着けたのだといえます。引き続きこぶしの会を支えてくださることをお願いします。

いよいよグループホームの建設が始まりました！

GH管理者　藤井　浩司

この度、グループホームの建設請負契約を新協建設工業株式会社（大阪支店）と結び、いよいよ建設工事が始まることになりました。

順調に工程が進めば、8月初旬に完成の予定となっており、なんとか9月には事業所を開所するつもりで準備を進めております。

先日、工事着工に先立って「地縄張り」（敷地内での建物の配置を縄で張って確認する作業）に立会ってきたのですが、白い糸で囲まれている実際の建物の配置を見て、完成する建物や、そこで暮らすなかまの方や、働くスタッフ、近隣を行き交っている地域の方々などの様子が目に浮かんでくるようでした。

これまで、長期にわたりあらゆる方にご支援をいただいているグループホーム建設計画ですが、工事着工で一つの節目を迎え、次の段階へと進んでいくことになります。

1月13日には入居を予定されている方への説明会も実施し、これから実際に暮らしていくための準備も進んでいます。

グループホームに必要なものはニーズ、場所（建物）、お金、そして、人です。なんとか集めていきたいと思います。資金作りや求人の募集などであらゆる方にご協力をお願いしているところです。引き続き、皆様のあたたかいご支援をよろしくお願いいたします。

社会福祉法人こぶしの会では、グループホームの建設、開始に向けて、障害のある方の暮らしをささえるスタッフを募集しています。

募集内容	グループホームでの生活支援。食事、入浴、整容などの介助や、生活全般のサポート。
勤務時間	夕方　16:00～翌　10:00までの宿泊をともなう勤務。 またはこの時間内3～5時間の範囲での宿泊を伴わない勤務。（時間帯は相談に応じます）
雇用形態	非常勤
給与	時給　920円　（学生、未経験者の方は850円～）　勤務一例…16:00～翌10:00の場合　17,940円
資格	不　問
経歴	不　問
お問い合わせ	担当（藤井まで）　TEL／0742-63-6504　E-MAIL／ma37ur55ml@kcn.jp

※新規に建設予定のグループホームの他に、現在稼働しているしているぐうぐうハウス、ひまわりの2ホームでもスタッフを募集しております。

居宅 News

Caring home

ぐうぐうハウス・ひまわり

余暇について思うこと

グループホームでは仲間たちが余暇を楽しんでいます。

ふゅーちゃーではホームでの余暇の活動もヘルパー事業で支えています。例えばカラオケに行き、4時間ぐらい心のゆくまで歌ったり、月に1度の散髪を心待ちにされたり、プールで良い汗を流したり、おしゃれな店でランチしたり、沢山歩いてリフレッシュしたり、中にはヘルパーではなく全く1人で東京へ大相撲や野球観戦へ行ったりと楽しみ方は人それぞれ。

「喉が枯れるまで歌ったわ」と良い表情を浮かべたり、「この髪型いいでしょ」と言いながらもう来月の日にちを確認したり、「このお店美味しかったよ」と仲間同士で楽しくお出かけの出来事を話したり、身体を動かしてスッキリされたりとほっこりとした雰囲気です。そして毎週、毎月と続けていくうちに「もっとこうしたい」「次はここへ行きたい」と要望が出てきます。言葉にするのが難しい仲間も普段と違う反応をされる時があります。そういう時は凄く嬉しい気持ちになります。概ね食べることへのニーズが多いですが、体重維持も含めて暮らしを守りながらその人の楽しむ時間を築いていき、(またやりたいことが変わり、それを表出されるのには時間を要しますが) 仲間のペースに合わせてゆっくりと待って、より充足される時間を創っていきたいと思います。

東京からその日の最終のバスで帰ってこられる仲間を待っているのは少しドキドキハラハラしますが、1人でチケットの段取りをして大都会へ行くなんて凄いこと。仲間1人1人が普通に暮らすことのお手伝い。なかなか幸せです。

(文責：赤尾信也)

就労継続B News

Starting work continuance B type

ここに・すたあと

すたぁと10周年をむかえました。

2009年4月1日に開所した「すたぁと」は、今年度10周年を迎えました。

当初は建物を建てるだけでせいいっぱいで、職員が子どもの時に使っていた机を譲り受けたり、うどんやさんのイスをご寄付いただいたりと、「ないないづくし」でした。それでも、仲間とともに「企業で働きたい」という思いを実現するため企業実習など積極的に行い、のべ15人が就職しました。

その間、兄弟施設となる「ここに」が開所。「すたぁと」も企業就労していた仲間が戻ってきたり、社会情勢も移り変わり、「なかまとともに楽しみ、はたらきたい」とねがいも変化しました。2つの事業所を行ったり来たり交流できるようにし、仲間自治会も発足しました。どんどん、「やってみたいこと」「行ってみたいところ」を出し合い、休日の開所日を仲間が企画し、とことん楽しみ始めました。

仕事は、①施設の中で「ハトムギ粒の選別」「新聞折り」「タックシールはり」 ②施設の外で「ハトムギ畑の除草」「企業での球根袋詰め」「ダイレクトメールの封入作業」というように施設内ではリラックスしながら、施設外では程良い緊張感を味わいながら取り組んでいます。

昨年末には、家族のみなさまにもお越しいただき、ささやかなパーティーを行いました。

「ここすた旅行」では、屋形船にのって、蟹会席をいただくぜいたくも楽しみました。

現在策定中の中期5カ年計画では、新GHのメンテナンス（掃除など）や原木シイタケ栽培など10年を期にあらたな挑戦もしていきます。

これからも、なかまや家族のみなさんとともに「こんなこともできるんだ！」というおどろきとよろこびを見つけていきたいと思います。

（文責：島　耕治）

相談支援 News

Consultation support

こぶしの会相談支援センター

「親亡き後」の財産分与、財産贈与問題からみえてくるもの

法人の冬の研修は、知財センターの行政書士による講演だった。個人型確定拠出年金ｉDeCo、特定贈与信託に生命保険信託…。障害者の終身保険や生活サポート保険、育成会会員限定の賠償保険に医療保険…。民間会社が障害者向けにいろいろなものを出していることがわかり、「親亡き後」の財産贈与に生命保険会社や銀行などが大きな関心をもっていることも実感した。国の公的障害年金は年々減らされ、生活保護も切り下げ。その穴埋めのように民間が「安心」を取り込もうとしている。

また、講演者が私設した「お悩み総合相談窓口」には、行政等でたらいまわしにされたり、どこに相談したらいいかわからない家族や当事者がたくさん訪れていることも。確かに、保健所や、行政が行う一般相談はどんどん縮小され、委託費も減らされている。きょうされんの相談支援部会が昨秋行った調査でも、年間100万以下の予算で一般相談が相談支援所に委託され、専任で専門的な力量をもった相談員の配置は到底困難な自治体が東北、山陰地方に続出していた。引きこもりなど時間をかけて対応したり、度々報道される障害者監禁事件等をくい止める「公的保障」がなおざりにされている。国がすすめる「全世代型社会保障」は、民間サービス導入や保険外サービスの拡充がうたわれ、社会保障予算の削減と負担増がベース。夏にはその最終報告が出される。注視し、障害のある人の生活実態を踏まえた議論こそ求めたい。　（文責：小針康子）

生活介護 News

Life nursing

こッから

パン工房・パンの部屋活動報告

『おはよう～』と8：30ぴったりにパン工房に入ってくる早出の仲間がいます。彼らは菓子パン作りと湯だね食パンの生地を作るために、この時間に出勤です。あいさつしながらも、手はすでに冷蔵庫の材料を探しています。在籍年数が１０数年の『超ベテラン職人』です。少々のトラブルがあっても難無く臨機応変にこなしてしまいます。

９：30定時出勤の仲間がやって来ます。施設の仲間と職員全員に挨拶を交わしてから工房に入ってくる仲間、二週間のロンドン旅行から帰国後の翌日には、まるで昨日も仕事をしていたかの様に淡々と機械を回す仲間。整理整頓がプロ級な仲間。個性あふれる仲間たちが一つのパンを完成させるために、それぞれの役割につきます。狭い工房の中でお互いの存在を気遣いながら、少々の失敗には、『ドンマイ！』の掛け声で気持ちをリセットし製造再開。パン工房・パンの部屋が間違いなく『ONE TEAM』であることを見せつけられる瞬間です。ただ、ただ『凄い！』の一言に尽きます。

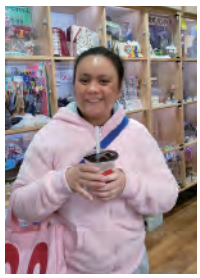
仕事の他に、月に一度は全員揃って余暇の時間を楽しみます。１月は奈良町へ行きタピオカドリンクを楽しみました。それぞれが笑顔とタピオカで頬を膨らませ、リラックスのひとときです。そんな時でも商店街にあるパン屋さんに自然と視線がいく『職人集団』。この集団には『ほんま、かないまへんわ～』と感服です。

皆様には日頃からこッからのパンをご愛顧頂きまして誠にありがとうございます。

昨年の増税に伴い今年１月より菓子パンと湯だね食パンをそれぞれ値上げをさせて頂くことになりました。菓子パンが各10円値上げ。湯だね食パンは1斤300円で販売させて頂いております。是非、お近くにお越しの際はお立ち寄りください。

素晴らしい『職人集団』が笑顔でお待ちしております。

（文責：城本知美）



社会福祉法人「こぶしの会」

障害ある人の暮らし支える

新たなグループホーム開設へ

「障害のある人が主人公」との理念のもと、障害者の暮らし全体を支える社会福祉法人「こぶしの会」（奈良市古市町、坂下伸一理事長）の新たなグループホーム建設が進んでいる。同町内の用地に今年8月ごろ、障害のある人が主体的に暮らし方を選ぶ社会を支える拠点として、新しいグループホームが誕生する予定だ。

（小幡直子）

「一人暮らしをしたい」「休日には友だちと買い物や旅行に行きたい」―。誰もが当たり前に自分らしく生きる社会の実現には「暮らしを丸ごと支える事業」が欠かせない。

昨年６月に退任した藤井正紀前理事長を送る「ありがとう会」に勢ぞろいした仲間たち＝令和元年７月（こぶしの会提供）

▽暮らしを丸ごと支える

同法人は法人格を取得する以前の平成元年、奈良市肘塚町に「かすが共同作業所」を開設。障害のある人の「働きたい」「働ける」という思いの実現を中心に据え、活動をスタートした。

だが、障害のある人たちの願いは「働くこと」だけではない。

「いずれ『地域で働き、地域で暮らす』が、支援の中心になる。必然的にグループホームが必要、ということは開設当初から、よく話し合っていました」。同法人常務理事で生活介護事業所「コミュニティワークこっから」施設長の古木一夫さんは振り返る。

▽近くの民家から

同法人のグループホームへの取り組みは約20年前、作業所近くの一軒家を借りての宿泊体験から始まった。

平成15年、元学生寮だった建物を借りて「女性のグループホーム『ひまわり』」、同16年、民家を借りて「男性のグループホーム『ぐうぐうハウス』」をそれぞれ開設。これらの実践を通して、既存の賃貸物件を活用したグループホームは設備面に課題があり、重い障害のある人が安心して暮らすには無理があるなどの課題も見えてきた。

また、同18年1月に長崎県の高齢者グループホームで発生した火災がきっかけで、重い障害のある人が入所する施設は、たとえ小規模でもスプリンクラーの設置が義務付けられ、賃貸物件活用のハードルが上がった。

▽みんなの願いを取り入れて

「グループホームを選ぶ仲間はもちろん、一人暮らしや高齢化する家族と暮らす仲間を支援する拠点として、自分たちで設計したグループホームをつくりたい」

やがて明確になったこの願いを具体化しようと同28年秋、建設委員会が発足。障害のある仲間、職員、家族、支援者らが意見、希望を話し合い、「多くの介助が必要な人も安心して長く暮らせる」をコンセプトに支援区分の高い人が安全に暮らせる設計に心を砕いた。

完成が近づく今、障害のある仲間の声の集約を担ってきた「仲間自治会」は新しいグループホームの名称について話し合っているところだ。

▽だれもが安心して暮らせる場に

新しいグループホームは2階建て、延べ床面積約468平方㍍。入居定員10人と短期入所4人が利用できる。職員が最も悩んだのは19人の希望者から入居の10人を決めること。「本当は家庭で暮らしたいけれど、高齢の親を安心させるため、入所を希望しているのかもしれない」など、「どこまで本音を聞き出せるか悩みながら、20～50歳代の男女10人を決めた」とグループホーム管理者の藤井浩司さん。入居する10人の障害の程度は支援度が最も高い、区分5、6の人が中心だ。

グループホーム「ひまわり」「ぐうぐうハウス」合同の誕生日パーティで外食＝令和元年５月（こぶしの会提供）

▽地域と真の共生を

昭和63年、「障害者が働く共同作業所を作る会」として発足した同法人は平成13年に法人格を取得。翌年、現在の場所に同法人の中心を担う施設「コミュニティワークこっから」を開設した。

この間、同法人は一貫して「地域に根ざし、共に歩むこと」を大切にしてきた。地域に開かれた祭りとして毎年秋に「こっから祭」を開催し、障害のある仲間が地域のイベントや清掃ボランティアに参加するなど実践を重ねてきた。

「こっから」のすぐ近くに建設が進むグループホームには「地域貢献ルーム」を設ける。坂下理事長は「新たなグループホームの実現には、地域の方の応援や協力が大きな励みになった。真の共生をさらに進める入り口として、地域の皆さんと共に『地域貢献ルーム』の活用法を探っていきたい」と話した。

▽豊かな選択肢を

念願のグループホームの完成はうれしいこと。でもそれは到達点ではなく通過点。古木常務理事は「ぼくらはつい、家族の支えからヘルパー利用へ、入所ではなく地域のグループホームへ、と言ってしまいがち。でも、誰とどこで暮らすかを選ぶのは本人。いろいろな選択肢があれば、たとえ障害が重くても、その人に合った生き方ができる。新しいグループホームを拠点に障害のある人の地域生活について、さらに考えていきたい」と話している。

新しいグループホームについて話し合った「仲間自治会会議」＝平成30年7月（こぶしの会提供）

暮らしのいろいろを話し合う「仲間自治会」のメンバー＝令和元年12月

メモ

「こぶしの会」は、もう一つのグループホームも計画中。「地域生活支援のための施設建設募金」を受け付けている。詳細は同法人、電話0742(63)6765、http://kokkara.jp/

2020年1月1日、こぶしの会の新グループホームの記事が奈良新聞の元旦の福祉特集で掲載されました。

なかま自治会

プレゼントえらびのはなし

年末恒例のこっからクリスマス会。それに先立ち、なかま自治会では皆さんに配るプレゼントをどうするか、役員のなかまが毎年話し合いをしています。

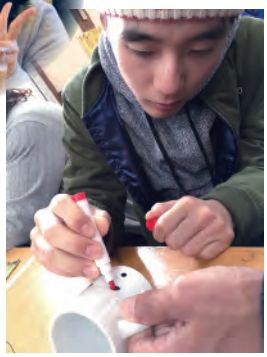
みんなの給料から集めた自治会費を使って、何を選べば喜んでもらえるのか、今度も様々なアイデアが出てきました。

みんなうれしいのはお菓子、でも食べ過ぎたらダメなのでおもちゃにしたら、でもそれぞれ好みがあるからコップはどうか、でも割れたり危なくないものにしないと…ゆっくり時間をかけて話がすすみます。

そうして自分だけでなく、いろんななかまたちの事を思い描きながら意見がまとまれば、次はお店に出かけてお買い物。注文や支払いから、恒例のサンタの恰好をしてのプレゼント配りまで、なかま主体でがんばります。

今回のプレゼントは、かわいくて実用的な今治タオルセットでした。　（文責　長江祐介）

2019年11月22日(金)、こっから日帰り旅行を催行しました。



今年も早めに仲間旅行委員が立ち上がり、委員を中心に案内板、しおり作り、クイズ作り行き先アンケート作りなど事前に準備をすすめてきました。仲間からのアンケート結果より候補を２ヶ所に絞り、プレゼンを行いました。その結果、行き先は滋賀のブルーメの丘に決まりました。

いよいよ旅行の当日、行きのバスでは旅行委員会主催のクイズ大会を開催！　車内はわいわいと大盛り上がりでした。ブルーメの丘に到着し、まずは事前に選んだクラフト体験へ。ソーセージ作りやキャンドル作りやマグカップの絵付けなど、それぞれオリジナルな作品が完成し、にこやかな雰囲気でした。

その後はお待ちかねの昼食タイム♪　焼き肉バイキングと旬菜バイキングに分かれ、９０分間たっぷり食べ、仲間も職員も大満足でした。食後はフリータイムでお土産を買う人、動物と触れ合う人、ＳＬに乗る人など、それぞれ楽しい時間を過ごしました。最後は総勢71名で集合写真を撮り、奈良へ帰りました。

来年はどこになるのか今から楽しみです♪　（文責：小西桃子）

みんなの期待を背負って、大人の世界へ･･･

１月14日にこっからにて成人式を行いました。今年、こっからで成人を迎えたのは西野智樹さんです。

年明けからこの成人式をすごく楽しみにされており、当日はスーツ姿でビシッと決めてきました。お父さんから『人の気持ちがわかる大人になってほしい』とお祝いの言葉をいただき、本人もその言葉をしっかりと受け止めていました。同じ班の仲間からも『一緒に仕事を頑張ろう』とメッセージをもらっていました。

これからの長い人生、みんなと一緒に頑張ろう！！

成人おめでとう　西野さん　（文責：田村智章）

今年もこッから祭は大盛況!

こッから祭 第18回

2019年10月27日(日)に第18回こッから祭が開催されました。

皆さんはこッから祭に「楽しい!! おいしい!! うれしい!! 赤ちゃんからお年寄りまでみんなで作る」といったサブテーマがあるのをご存知でしょうか？　当日はそのテーマどおりに楽しいステージや企画、おいしい食べ物、沢山の笑顔で会場が大盛況でした。今年は初登場の企画や出店が多くヴァージョンアップしたこッから祭でした。総勢1100名もの方々にご来場いただきました、祭に足を運んでいただいた方、出店、企画にご協力をいただいた方、関係者など…祭に関わっていただいた全ての方に「ありがとうございます！」を伝えたいです。そして今後ともこぶしの会の活動をさまざまなところから応援していただきますようお願い申し上げます！

理事長あいさつ

初 ボランティア（東市小学校より3名）

初 野外オセロ

大盛況のバザー

初 スタンプマン（こッから仲間5名による）

初 みたらし団子（あすならホーム高畑様）

初 ビリビリ棒（奈良県自動車車体整備協同組合様）

ここすたのお店

楽しいステージ

ふゅ～ちゃ～ コロッケ

こッからオールスターズ

初 15周年記念絵柄の顔出しパネル

絵本ギャラリー（みなくる様）

企画取材　障害者福祉施設　ドキドキの挑戦

こっから豆腐と、ミナ ペルホネン。

阿南セイコ（さとびごころ 編集長）

ミナ ペルホネンは、聞き慣れない人には舌を噛みそうな名称かもしれないが、デザイナー皆川明氏が1995年に設立した、オリジナルデザインのテキスタイルによる服作りが特徴のブランドだ。そのミナ ペルホネンが提案する心地よい暮らしのための店として、2016年、南青山にオープンしたのが「call（コール）」。今、この店の棚に奈良の福祉施設が作った豆腐が並んでいる。それも、日頃から有名な企業とコラボすることを得意とするタイプではなく、どちらかというと素朴に地道にコツコツ活動する「コミュニティワークこっから」の豆腐なのである。

とうふ工房を運営する社会福祉法人こぶしの会の常務理事である古木一夫氏（55才）と筆者は、年来の茶飲み友達でもあり、日ろごの活動ぶりや理念などはよくうかがい、豆腐やパン作りには、味に自負心を持って励んでおられることも知っていたし、実際しばしば購入もしている。しかし、その古木氏の口からおよそ出てきそうにない「ミナ ペルホネン」という名詞が出てきたときは、飲みかけたお茶を手にしたまま、少々驚いた。なぜまたどうして？こっから豆腐とミナ ペルホネンの隙間を埋める経緯を聞きに、とうふ工房を訪ねた。

callのInstagramで紹介された商品。
call
〒107-0062 東京都港区南青山 5-6-23 SPIRAL 5F
TEL 03-6825-3733　www.mp-call.jp

ミナが好きでした

これを語るには、一人の女性職員の存在に触れなければならない。川野美幸さん（36才）だ。ハウスマヌカンの経験もあり、ミナ ペルホネンのファンだった。そんな彼女が2017年、聞き捨てならない情報をゲットする。くるみの木オーナー石村由紀子氏が総合プロデュースした奈良市の観光複合施設「鹿の舟」で洋服やグッズが展示&販売される「minä perhonen展」に、皆川氏がやってくることがわかったのだ。川野さんは、気後れしながらも、古木氏など数名を誘って参加を申し込んだ。ちなみにこの時点では古木氏もまだ、ミナ ペルホネンを知らない。「古木さんが尊敬する糸井重里さんと皆川さんは、お友達なんですよ。行きましょう」と、わずかな親和性を頼りに法人幹部も誘い入れた。

この時、川野さんは密かに様々な妄想をシミュレーションしていた。「サインをもらう」「こっからのことを伝える」「パンと豆腐が美味しいことを伝える」。それらは、ほぼ現実となった。幸運なことに、callでは他県の福祉施設の品物を取り扱っていたことも、川野さんの背中を押した。川野さんは会場で、数度にわたり皆川さんに接近する勇気を振り絞り、「じゃあ、名刺を渡すからここに送ってみてよ」という一言をもらうことができたのだった。10月7日、土曜日のことである。驚きと喜びの中で川野さんは考える。「今までお付き合いした経験のないような、大きな会社なんだから、スピード感が大事だわ。月曜日に発送しよう」「最初で最後のチャンス、パンも美味しいけど豆腐に絞ろう、こっからの仲間（こっからでは利用者たちをこう呼ぶ）のことも伝えよう」…。

豆腐工房で仲間とともに豆腐作りに励む田村さん

皆川明氏（左）とともに。きっかけを作った川野さん（右）。

突然降ってきたチャンス

寝耳に水なのは、とうふ工房の現場である。工房の開設時から担当を務めている田村智章さん（40才）が、この案件を引き受けることになった。サンプルを発送し、皆川さんやcallの方達に試食してもらう。この発送次第で、取り扱ってもらえるかどうかが決まる。週明けに出勤したら大仕事が待っていたことになる。このチャンスに田村さんも食らいついた。

数種類ある豆腐シリーズをバランスよく詰め込み、豆腐の特色、魅力、工房としての取り組みなどを伝える資料も添付。運送中の破損や水浸みを防ぐ工夫もし、価格設定も考えた。あとは返事が届くまで、心臓を高鳴らせながら、ただ待つことになった。

ある日、事務局にメールが届く。スタッフがあたふたし始める。「callさんからだ」「わあ、どうしよう」「もうだめだ！」何がダメかわからないが、人は本当に望んでいることが叶うかどうかわからない時「だめだ」と叫ぶことはある。生唾を飲み込んで開いだメールには、「美味しかったです」の文字があった。

取引が始まってまもない昨年2月、店に並んだ豆腐を直に確かめるべく、そして仲間のことを知ってもらうために、数名でcallを訪問した。

上 / 店内の様子
中 / ショーケースに陳列された豆腐。一つ一つの間に紙を挟んで、丁寧に置かれていた。
下 / ショップの前で。左からcallスタッフの岡さん、上林さん、田村さん、松本さん、佐野さん、川野さん。

callは、ミナ ペルホネンが提案する心地よい暮らしのための店。callという店名には2つの思いが込められている。一つは、ミナ ペルホネンのデザイナー 皆川 明氏が、国内外問わず暮らしの中で感じてほしい心地よいものを呼び寄せるように集め紹介する場。もう一つは、creation-all。たくさんのプロフェッショナルと一緒にものを作り紹介する場。

そして、やりとりのメールが届く度にハラハラしつつも、話はより具体的になっていった。取り扱い品目は4種と入り数各6個。「絹とうふ」は、単価を考慮して通常より小さく、call用のサイズの充填方法を整えた。パッケージも、提案を受けてこっからのもう一つの得意技である紙漉きチームによる和紙でくるみ、ロゴも新しくデザインした。「callにはカフェもあるので、売れ残ったら料理に使います。とりあえず、3ヶ月、やってみましょう」との言葉にこぎつけたのは、年末のこと。こうして2018年1月からの3ヶ月、こっからの豆腐がついにcallの棚に並ぶことになった。

安心するのはまだ早い？

田村さんの話を聞こう。

「僕らはこれまで、顔の見える関係のお客様を対象に作ってきました。そこには、もし何あってもフォローできる安心感もありましたが、今回は新規の、東京の、おしゃれなお店…というこれまでにないお客様。取り扱いが決まった時は嬉しかったですし、仲間たちの大きなやりがいになりました。最初はいつも緊張していたので、言葉に思いやりのあるcallさんのメールには、ホッとすることもしばしば。もしかしたら、callさんは3ヶ月だけというお気持ちだったかもしれません。しかし、僕たちとしては、『これきりにはしたくない』と思いがありました。『数が減ってもいいので、続けさせて欲しい』と働きかけ、あと3ヶ月、さらに3ヶ月と続けるうちに『味の評判がよく、リピーターのお客様がいらっしゃいます』との声がいただけるようになりました」。

callからは後に、「皆さんの熱意とお味の良さがお仕事をご一緒したいと思う決め手」となったと知らされ、職員と共に、内心ハラハラしてきた古木氏も、そっと安堵する。

根本は、仲間の幸せ

いつでも狙いを定めて戦略的に行動できる人もいる。そうでなかったとしても、秘めた熱い思いから生まれた小さなきっかけを、大事に育てる道もある。こっからは後者かもしれない。普段から「仲間の幸せとは何か？」を中心に据えて取り組み、地道に続けることで信頼を築いていくこっからのあり方は、この豆腐作りにも表れているようだ。

2019年10月現在、取引は継続中。次に古木氏とお茶を飲むときは、どんな近況が聞けるのだろう。

とうふ工房こっから

こっからの豆腐作りが始まったのは2006年度。国産丸大豆を使った「豆を味わう」というコンセプト通りの美味しさが自慢。仲間たちは、今や職人の雰囲気を漂わせるベテランになった。

社会福祉法人こぶしの会
生活介護事業コミュニティワークこっから
〒630-8424 奈良県奈良市古市町529-4
TEL 0742-63-6765

今回、2019年さとびごころ39号に掲載していただいた、「こっから豆腐と、ミナ ペルホネン」という記事を、転載させていただくことができました。『さとびごころ』は「100年住み続けたい奈良」をキーワードに、奈良県の様々な地域や業種において「ひと」や「自然」を大切にした活動を実践している市井の人たちを取り上げ、ゆるやかなネットワークを生み出す「地域づくりマガジン」です。WEB上でも公開されていますので興味のある方はぜひ覗いてみてください。http://satobigokoro.org/

平山郁夫版画展のご報告

お正月休み明け早々の1月8日より13日までの6日間にわたって『平山郁夫版画展』～シルクロード・仏教伝来・平和への祈り～を開催いたしました。

初日からたくさんの反響があり、最終日には500名を超える方々にお越しいただきました。合計で2,100名の来場者数は同版画展としては過去最高の動員数となりました。

災害被災地への支援募金にも、本当にたくさんのご協力を賜り、心より感謝申し上げます。日本ユネスコ協会『東日本大震災子ども支援募金』ときょうされん『障害者自然災害支援基金』に計20万円の寄付金を届けることが出来ました。ありがとうございました。

これからも、多くの方々とつながっていける活動に取り組んで参ります。今後ともご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

創刊50号記念プレゼント企画！

2002年にこぶし通信が創刊されて今回で50号目を迎える事が出来ました。

ここまで続けられることができ、毎号読んでいただいております皆様に本当に感謝しております。そこで!!!

創刊50号の感謝の気持ちも込めて盛大にプレゼントをご用意しております。しかし…申し訳ありませんが太っ腹にとどなた様もご応募どうぞ！　とはいきません…。今後の通信の記事掲載の参考にさせていただきたいと思いますので以下のアンケートにお答えの上、ご応募ください。応募方法はファックス、メール、お葉書にてお願いいたします。（応募にかかる通信費は各自でご負担下さい。）通信編集部による厳正なる抽選の上、当選者の方にのみご連絡差し上げます。

■アンケート項目

① 今回の通信で面白かった記事はありますか？
② 読んでみたいと思うような記事があれば教えてください。
③ おすすめの機関紙（種類等は問いません。）はありますか？
④ お名前
⑤ 当選の際に連絡を差し上げる連絡先
（電話番号またはメールアドレス）

■応募先

ファックス：0742-63-6766　メール：kokkara@kokkara.jp
ハガキ：〒630-8424　奈良市古市町529-4
コミュニティワークこっから　こぶし通信50号企画係

■応募締め切り

2020年9月末です。どしどしご応募下さい！！

編集後記

ある日の夕方の飲食店。客の入りは、2～3割程度で少ない。いつもの早食いであっという間に食べ終わろうとした時に、なぜか喉にご飯がひっかかり、大きく何度か咳き込んだ。その瞬間に周りの視線を感じ（思い込みかもしれないけれど）、同時にヤバいと、必死で咳が出そうになるのを喉の奥で抑え込んだ。この間の騒動で、たかが喉詰まりの咳ぐらいにも無意識にこんなに周りの目を気にしてしまう自分に驚いた。2月後半からの緊急な非常事態宣言に、あらゆる世の中の動きに急ブレーキがかかってしまった。収束も予測できないような、これまで経験した事のない事態なのはわかったうえで、それでもこのギスギスしたような、監視し合うような空気感というか。恐れや不安は、今の時代でもあっという間に世の中にムードを作ってしまうということを実感しています。こぶしの会でもこの間の対応を検討し、当面3月末までは、あらゆる活動に制限を行っています。これまで積極的に施設の枠をこえてたくさんの方々と交流し、仕事を通して社会とのつながりをすすめてきたので、しばらくは多方面でご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご理解をよろしくお願いいたします。

とはいえ、今日も仲間のみんなは元気です。できる限りの配慮をしながら、できるだけ普段通りの毎日をと仲間も職員も笑顔で過ごしています。今回の教育の分野での一斉休校要請に対し福祉の分野（児童デイ等）が支えてくれている現実があります。今回のこういった流れが正しかったのかどうかは今後の課題としても、今はこんな時だからこそ、みんなで力を合わせて乗り切っていかなければと思います。（古木一夫）